〈**Documents and Data**〉

元住友銀行専務取締役 岡部陽二インタビュー
――学生時代の高坂正堯

服　部　龍　二　編

An interview with Yoji Okabe, former Sumitomo Bank senior managing director: Masataka Kosaka in student days

Ryuji HATTORI, ed.

Abstract

This paper introduces an interview with Yoji Okabe, former Sumitomo Bank senior managing director. Okabe was a friend of Masataka Kosaka (1934–1996), a professor of Kyoto University. Okabe and Kosaka attended a private school named Rakuhokukai for five years before entering Kyoto University.

Okabe and Kosaka engaged in merger of alumni associations of Kyoto Daiichi Junior High School and Rakuhoku High School, when they were students of Kyoto University. Okabe and Kosaka got acquainted with Eiichi Nagasue, the representative on the side of the Kyoto Daiichi Junior High School. Nagasue became the chairperson of the Democratic Socialist Party. Okabe and Kosaka kept in touch with Nagasue even after graduating from the university.

Kosaka visited home of Okabe in London when Okabe worked abroad. Their wives were also good friends.

Key Words

Yoji Okabe, Masataka Kosaka, Eiichi Nagasue, Rakuhoku High School, Kyoto University

目　次

下鴨国民学校から洛北中学校特別学級へ
洛北会と桑垣煥先生
洛北高校時代
京都大学法学部時代
大学卒業後

京都大学の国際政治学者であった高坂正堯の幼年期について知られているのは，父の高坂正顕から感化を受け，早熟な才能を開花したというものであろう．拙著『高坂正堯――戦後日本と現実主義』（中公新書，2018 年）も，そのような文脈で書かれている．

本稿が紹介する元住友銀行専務取締役・元広島国際大学教授の岡部陽二インタビューは，それとは別の一面を伝えている．高坂は京都市立洛北中学校で，特別学級という英才教育を行うクラスに入っていたものの，特別学級は１年で廃止された．特別学級がなくなるとき，父兄が子供の教育を心配して洛北会という私塾を立ち上げた．高坂は中学２年から高校卒業まで５年間，毎週土曜日に私

塾の洛北会に通った．そこで数学や英語を学ぶとともに，京都大学理学部助手の桑垣煥（くわがきあきら）から「全人格的な教育」を受けたという．高坂は生涯にわたって洛北会の同窓会に参加し，歓談やブリッジを楽しんだ．

また，洛北高校生徒会長であった高坂は京都大学法学部１年生になったとき，岡部とともに洛北高校同窓会を旧制京都第一中学校の同窓会と合併させる作業に携わっている．その過程で二人は，京都一中側の代表だった永末英一社会党府議と親しくなった．永末が国会議員に転じてからも関係は続いており，総選挙のとき高坂は京都第１区で永末に投票していたようである．

拙著『高坂正堯』では，高坂が永末に投票していたと推測したが，高坂と永末の接点については明らかにできていなかった．

高坂が学卒助手に採用された経緯に関するくだりも興味深い．というのも，岡部は京大法学部に助手として残れないかと商法の大隅健一郎教授に相談したところ，もう高坂に決まっていると告げられたという．当時は「解釈法学とそれ以外という分け方」で学卒助手を採用しており，岡部や高坂の学年は「それ以外」の分野から採用予定と聞かされたというのである．高坂の学卒助手採用には，そのような「学内の力関係」があったと岡部は述べている．高坂が優秀であったことは間違いないにしても，採用する側の事情や力関係という視点は，ともすると高坂研究で抜け落ちてしまいがちであろう．そのころ岡部の父親，岡部利良（としよし）は京大教養部の教授であり，のちに京大経済学部長となる．

岡部には，岡部陽二『国際金融人・岡部陽二の軌跡――好奇心に生きる』（日本経済新聞出版社日経事業出版センター，2018 年）という自伝があり，そこでも高坂に論及している．

岡部陽二インタビュー

日時：2019 年 2 月 4 日
会場：日本工業倶楽部
インタビュイー：岡部陽二（元住友銀行専務取締役・元広島国際大学教授）
インタビュアー：服部龍二（中央大学総合政策学部教授）

下鴨国民学校から洛北中学校特別学級へ

―― いただいたメールで，岡部先生，高坂先生の小学校時代に触れられていますね．

岡部　高坂先生は下鴨国民学校卒業です．

―― 当時の名称は，下鴨国民学校ですか．

岡部　そうです．我々の年代だけは金輪際，小学校というのには入っていないのです．国民学校に入って国民学校を出ました．出た後の４月１日に国民学校は小学校に戻ったのです．

―― そうしますと，高坂先生は下鴨国民学校ですね．

岡部　そうです．下鴨国民学校卒です．

―― 下鴨国民学校を昭和 22 年 3 月に卒業されたわけですね．メールによりますと，高坂先生は昭和 22 年 4 月に，旧制の京都府立第一中学校に併設された新設の京都市立洛北中学校の特別学級に進学されています．

岡部　市立洛北中学の特別学級に入ったのです．

―― 京都市立洛北中学校が旧制京都府立第一中学校に併設されたというのは，同じキャンパスに２つの中学があったということですか．

岡部　そうです．旧制の京一中は府立，府の所管でした．そのなかに，当時，終戦後で校舎が不足していたので，京都市が下鴨中学というのをつくる予定だったのですが，それが間に合わないため，洛北中学校というのを京都府立一中のなかに借りてつくったわけです．ですから，この二つの旧制と新制の中学校は管理母体が府と市と違っていました．よくこんなことができたなと思いますね．

―― 名前は京都市立洛北中学校だったわけですか．

岡部　そう，市立洛北中学校です．

―― そのなかで，高坂先生は特別学級に入っ

たわけですか.

岡部　そこに特別学級という別枠のクラスをつくって英才教育を志したわけです．特別学級というのは，この絹川定君のレターによると36人（？）が定員であって，京都市内全域から募集したということです．入試の競争率はかなり高く，よくは分かりませんが，3～4倍ぐらいはあったのでしょうね．定員36人にクエスチョンがついていますが，36人か40人か，それぐらいだったと思います．1クラスだけでした．高坂はこの特別学級に応募して，受かったのです．ただ，その特別学級というのは，そういう英才教育まかりならんということで1年で廃止されてしまったのです.

――　1年で特別学級がなくなって，一般の…….

岡部　その洛北中学校の一般枠の2年次に編入になったのです.

――　そのときは，下鴨中学校ではなくて，洛北中学校ですね.

岡部　洛北中学校です．洛北中学校というのは一般には2年間で消滅したとされています．3年になるときに，在校生は新設の下鴨中学に移ったということになっているのですが．その特別学級の生徒だけは，特例でもってもう1年残留させて，それで，3年生を終えて洛北中学校を卒業したのです．3年次まで在籍したのは，その特別学級の生徒だけでした．下鴨地区の中学生は皆新設の下鴨中学に移されたのです.

それから，その特別学級に入ったのは京都師範附属小学校から受かったのが10人ぐらいいました．彼らは1年間で特別学級が終わったときに，また元の京都師範附属に戻っているのです．ですから，おそらく高坂が卒業したときの特別学級というのは20人ぐらいしかいなかったと思います．それぐらい少人数でしたから，ついでに置いておいたという扱いであったのでしょうね.

――　科学学級ではなくて，特別学級ですね.

岡部　特別学級というのが正式の呼称でした.

――　いただいたメールによると，当時は科学学級とも呼ばれていたんですか.

岡部　そうです．それは同じような英才教育コースが旧制京一中にあったり，それから，京都師範附属の国民学校にもあったりしたのです．それを特別科学学級と呼んでいたので，それとの混同で，科学学級とも言っていましたが，正式には特別学級です.

洛北会と桑垣煥先生

――　メールによると，その特別学級が廃止されることになって，同学年の石川明さんのお父さんらがお子さんの教育を心配されて，私塾の洛北会をつくられたわけですか.

岡部　そうです．この洛北会が始まったのは，中学の2年の初めであったと思います.

――　そのとき，入塾のテストはあったのでしょうか.

岡部　テストのようなものはなかったと思います．希望者は全部入れたはずです．ただ，特別学級の定員は36人で，京都市内全域にわたっていましたから，そのうちの半分が参加したとしても18人でした．当初はそれぐらいの参加者であったかと思います．そこからまた脱落者も出て，結局，15人か16人になり，この仲間で5年間続いたのです.

――　洛北会は岡部先生，高坂先生，石川さんらの1学年だけを教えていたのでしょうか.

岡部　もちろん1学年だけです.

――　1学年だけで，その前後はないわけですか.

岡部　なかったです．その特別学級というのは1年間しか続かなかったのですから．その1年間に在籍した者のうちの半分ぐらいが，その父兄が相談してつくった洛北会に参加したのです.

――　そうしますと，一般的な塾というよりも，その学年だけに特化した私塾だったということですか.

岡部　そうです．当時は進学塾はそもそも存在しなかったですから，非常に特異な存在であったと言えます．また，その目的が高校や大学の受験勉強かというと，どうもそうでもなかったような

のですね.

―― といいますと…….

岡部 要するに教えてもらったことは，受験の数学のレベルではなかったのです.

―― そうでしたか.

岡部 高木貞治著の整数論とか，難しい本を持ってこられて，今でも覚えていますが，順列とか組み合わせとか，それから，微分積分を超える高等数学を習っていたのです．そんなものは受験勉強の役には立ちませんでした.

―― 岡部先生は中学2年生のときに大阪から洛北中学に転校されて，洛北会に入ったわけですか.

岡部 いや，私は，小学校は京都師範附属の国民学校に入ったのです．5年生の初めに，満州に父親の転職で行って，6年生のもう終わりぎりぎりの12月に日本に帰ってきて，昭和22年の3月に兵庫県の諸寄という田舎の小学校を卒業して，その年の4月に今度は母方の祖父に預けられて，大阪の住吉一中に入って，そこに1年いて，京都へ帰って来たのです．そこで，京都師範附属小学校に追加してできた新制中学校に編入学を許されたのです.

―― そうでしたか.

岡部 だから，私はその特別学級についてはまったく知らないのです．私1人は特別学級ではなかったので，洛北会に入る資格もなかったのですが，そこに入っていた友人の多くと小学校から親しかったので，父兄の知り合いもあって，母親が交渉して，そのコネで無理やり入れてもらったのです.

私だけが異端ですが，あとは全部，洛北中学校の特別学級に1年間いた連中でした.

―― 洛北会の名簿を拝見いたしますと，岡部先生，高坂先生，石川さんなど，当時の学生15名のほか，洛北会で教えられていた桑垣煥先生のお名前があります．桑垣先生は，京大の理学部数学科助手でよろしいですか.

岡部 京大の桑垣煥先生です.

―― 洛北会で教えていたのは桑垣先生と，あとは英語の先生が1人ですか.

岡部 そうです．その英語の先生のお名前が金輪際，思い出せないのです．この絹川君からの返事によると，「英語は習っていない」というようなことを言っているし，それほど記憶が薄いわけです.

―― 英語の先生は1人でしたか.

岡部 1人で，しかも，5年間通してではなかったのです．2年か3年間ほど習ったと思うのですが，誰に聞いても先生のお名前は憶えていません.

―― その英語の先生もやっぱり京大の方なんでしょうか.

岡部 そうだったと思いますが，それも分かりません．名前はおぼろげにこの間までは憶えていたのですが，忘れてしまいました．英語にはそれほど力を入れていなかったということです.

―― 英語の先生は何人か替わられたわけですか，その2，3年間で.

岡部 ひょっとすると，2人替わられたのかもしれません.

―― 桑垣先生は5年間ずっと教えられたのですか.

岡部 そうです，ぴったり5年間です.

―― 桑垣先生の影響は，高坂先生のお父様と比べてどれぐらい大きかったと推測されますか.

岡部 それは，私には判断出来ませんが，桑垣先生から学んだところがきわめて大きかった点は間違いありません.

―― 桑垣先生の影響は大きかったわけですか.

岡部 はい，そうだと思います.

―― 桑垣先生は数学の先生だったんですよね.

岡部 数学の先生でした．ですが，数学教師というよりも，一緒に遊んでもらって，全人格的な教育をしていただいた優れた先生でした.

―― はい.

岡部 先生と言っても，まだ京大を昭和17年に出られたばかりで，歳は我々より14歳上でした．そんなに歳も違っていなかったのです.

―― 洛北会で最初に会ったときは，桑垣先生はまだ20代後半ぐらいですか.

岡部　そうですね．2年前に，九十幾つでお亡くなりになりました．

――　そうでしたか．桑垣先生は，京大の大学院を出られた直後ぐらいに洛北会で教えていたわけですか．

岡部　京大の理学部の大学院を出られた数学の新進気鋭の先生でした．当時は京大の助手をしておられました．

――　30歳前ぐらいですか．

岡部　最初は30歳になっておられないぐらいでした．

――　桑垣先生には5年間習われたわけですね．

岡部　そうです．5年間，毎週1回教えてもらいました．その後も5年ぐらいは，大学に入ってからも非常に親しく付き合っていただきました．

洛北会が解散してからもずっと，そのOB会，ブリッジの会があって，毎月のように集まっていたのです．

――　それは大学に入ってからのことですね．

岡部　大学に入ってからです．それから，絹川君からのメールにも書いているように，江田島の旧海軍兵学校の見学に連れていってもらったりもしました．

――　洛北会では，数学と英語だけ習ったけれども，数学のほうが長かったわけですね．

岡部　5年間，しかも，大学レベルのことを習ったのですから，すごいことであったのです．

――　洛北会の教室は百万遍のお寺を借りていたわけですか．

岡部　百万遍のお寺の正門を入って左手へちょっと行った所にあるお寺の住職の住んでいる家の一室でした．一室と言っても，幅が3メートルか4メートルぐらいのちょっと広い廊下みたいな所でした．生徒は15人でしたから，そこに机を置いて座布団を敷いて，まさに寺子屋式でした．黒板だけが前にあって，そこで桑垣先生から2時間ぐらい教えてもらったのです．

――　数学を習った後に英語があるわけですか．

岡部　そう．英語があったときは．

――　英語は毎週あるとは限らないんですか．

岡部　いや．英語も習っていた期間中は毎週でした．週に1回，土曜日の午後に集まって，数学だけじゃもったいないということで英語を入れたのでしょうが，英語は5年間フルにはなかったです．

――　そうしますと，英語が始まるのは中学3年ないし高校1年のころですか．

岡部　そうであったかと思います．だいぶ遅れてから，英語もやろうじゃないかということで3年ぐらい続いたと思うのですが．

――　そのお寺の名前をご記憶ですか．

岡部　お寺の正式な名前は知恩寺ですが，一般には百万遍のお寺で通っています．百万遍のお寺のなかの建物の名前は憶えていませんが，百万遍のお寺の構内であったことは間違いありません．

――　百万遍のお寺のなかで，洛北会の授業が行われたわけですか．

岡部　その通りです．

――　洛北会の名簿を拝見しますと，岡部先生，高坂先生など15人いらっしゃいます．全員男子学生ですか．

岡部　全員男子でした．

――　洛北中学の特別学級自体が，ほぼ男性だったんですか．

岡部　100パーセント男性だけであったと思います．

――　そうですか．

岡部　女性は一人もいなかったと思います．

――　岡部先生が，高坂先生と初めて会ったのは洛北会ですか．

岡部　初めて会ったのが洛北会であったのは間違いありません．5年間は，毎週必ず，洛北会で顔を合わせていました．

――　中学校は違うわけですね．

岡部　中学は違いました．

――　当時の高坂先生は英語や数学がよくできたんでしょうか．

岡部　いや．15人の中で，ずば抜けてよくできたという印象は仲間の誰も持っていません．

――　特別学級の方たちなので，みんな，よくできたという感じですか．

岡部　そうです．むしろ，高坂とか私とかは，数学については劣等感を持っていたのではと思います．

――　劣等感ですか．

岡部　洛北会の仲間の大多数は，理系の学部に進みました．文系へ進んだのは，高坂と私を含め5人だけでした．加藤正美君は浪人して慶應大学から住友銀行に入り，笹谷一成君は京大の経済学部を出て郵政省に入り，友田正久は神戸大学から伊藤忠へ入りました．その辺は文系でしたが，あとの仲間は大体，理系へ進みました．伊藤貞男君は，NTTのホームページを開けると名前が出てくる携帯電話の草分けを担った秀才です．

――　はい．

岡部　特によくできたのは，早く亡くなった竹田静思君です．ものすごい秀才で，防衛庁に入って，防衛庁で科学技術の先端を切り開いた男です．ひょっとすると，高坂の息子（昌信）が防衛大学に行ったのも，彼の影響があったのではないかと，私は思っています．

――　昌信君は自衛隊でパイロットになられるんでしたかね．息子さんもよくご存じですか．

岡部　いや，まったく存じません．

――　先ほど洛北会で高坂先生は，それほどずば抜けていたわけではなかったという話でした．それ以外には，どんな印象を持たれましたか．

岡部　とにかくざっくばらんで，一言で言うと，やんちゃとかひょうきんとか，そんな印象でした．また，機関銃の連射のように早口でよくしゃべる男でした．

――　ひょうきんですか．高坂先生は，よく冗談を言っていたわけですか．

岡部　そう．冗談も言うし，よくしゃべるし，愛すべき人柄だったですね．

――　そうですか．割と人気者という感じだったんですか．

岡部　そう，大変な人気者でした．かといって，人と群れるという感じではないのが不思議なところでしたね．これは非常に特異な性格でしたね．彼と本当に親しい友達はいなかったかというと，私はいなかったのではと思っています．もちろん，それぞれの分野では，親しくしていた友人もたくさんいたのでしょうが．

今でも親しくして付き合っている，Eメールにも書いた谷口安平先生は，高坂先生と同期で京大の先生をずっと同じ期間，やっていたわけです．教授会には毎月一緒に出ていたけれど，谷口君に聞いても，ほとんど高坂のことを知らないですね．同年，同期の京大法学部教授で，不思議な話です．

それから，僕が今でも親しくしている小池正輝君は京大囲碁部で4年間ほとんど毎週，高坂と碁を打っていたと言っています．ですが，彼も高坂との付き合いは囲碁だけで，それ以外の付き合いはなかったようです．

それぞれの分野での親しい友人はいたのでしょう．学問分野での交友関係は，私には分かりません．

――　岡部先生も，高坂先生と囲碁をされましたか．

岡部　いや．残念なことに，当時は私は碁をやっていなかったのです．

――　囲碁以外で，例えば，野球を一緒にやったりということはありますか．

岡部　野球もしていなかったですね．私は野球嫌いでした．

――　あまり一緒に遊んだという記憶はないですか．

岡部　一緒にそういうふうに遊んだという記憶はありませんね．ブリッジをして遊んだりした程度です．

――　それは京大へ入ってからのお話ですか．

岡部　京大へ入ってからです．中学・高校時代にそう親しく遊んだという記憶は残っていません．

――　送っていただいた，栗田さんのご論考（栗田瑞夫「丸山眞男 高坂正堯 二人の碩学」日本工業倶楽部『会報』第263号，2018年）には，高坂先生がバッターでは左打ちだったとありますね．

岡部　そうだったらしいですね．

――　左打ちというのは，ちょっと意外な感じがしたんですけど．

岡部　そうですね．

―― 右投げ左打ちだったのか，左投げ左打ちだったのか…….

岡部 彼は，その点はどっちかというと無理やり右利きに変えさせられたのではないでしょうか．確か，字は右で書いたと思うのですが，本来は左利きだったのかもしれません．

字は下手くそだったと記憶しています．私も同様ですが．私の息子がそうなんですが，両手使いは効率的で研究者には向いているのでは．

―― 左から右に矯正したというのは，国民学校のころでしょうか．

岡部 いや，それは分かりません．

―― 洛北会で初めて会ったとき，高坂先生はもう右手で文字を書かれていましたか．

岡部 右手と思いますが．確かではありませんが，そんな感じを持っています．

―― もう何十年も前の話ですからね．

岡部 70年前のことです．

―― 岡部先生と高坂先生はお互いに何と呼び合っていましたか．

岡部 それもはっきり憶えていませんが，「高坂」と言って呼び捨てていたと思います．

―― 特にニックネーム，あだ名はなかったですか．

岡部 なかったですね．「正堯」と言ったこともないし，あだ名もなかったですね．

―― 洛北会は，高坂先生，岡部先生が中学2年の4月から始まったんですか．

岡部 おそらく，4月か5月でした．

―― 岡部先生，高坂先生はじめ洛北会の15人というのは，洛北高校に行った方が多かったわけですか．

岡部 いや，そうではありません．

―― ほかの高校に行った方も，多かったわけですか．

岡部 洛北高校に行ったのはむしろ少なかったですね．高坂と私のほかには，加藤正美君，杉山一郎君と，亡くなった沼田手束君と5人でした．特別学級というのは，生徒を京都市全域から集めたわけですから，多くの高校に分かれたのです．鴨沂とか，朱雀とか，堀川とか，山城とかバラバラでした．

―― 先ほど，桑垣先生が数学だけでなくて，人間形成のうえでも大きな意味を持ったんじゃないかとおっしゃっていたかと思います．教わったのは，受験数学だけでなかったということですか．

岡部 人格形成というとちょっと大げさかもしれませんが，論理的なものの考え方や筋道の立て方を教わったのは貴重でした．それを徹底して教え込まれたのですね．

先生は余技として，特許も幾つか取っていらっしゃるのですが，ルービックキューブのような数学を応用した知的なおもちゃの開発を趣味でずっとやっておられました．それをもう一生続けておられたのです．そういう独創的な発想の特異な先生でした．よく，その数学おもちゃをもらいました．おもちゃと言っても，ルービックキューブのように簡単には解けない，高級なおもちゃでした．

―― 桑垣先生の専門は数学ですよね．

岡部 そう．数学一筋でした．純粋の数学者ですね．

―― はい．

岡部 だけど，趣味で，その数学を応用した，そういう科学玩具の開発なんかもやっておられたのです．

―― 高坂先生が中学生のころ，お父様の高坂正顕先生は公職追放になっていたかと思います．そのことについて高坂先生と何か話したということはないですか．

岡部 いや，それはまったくなかったです．

―― 高坂先生のお父様がそういう方だということはご存じでしたか．

岡部 哲学者で京都学派の泰斗として有名であったことは知っていました．

―― それでも，あまり話題にはしなかったですか．

岡部 それはなかったですね．

―― 公職追放されていたので，言いにくい感じだったんですか．

岡部 いや，当時はそういう意識すらなかった

です．高坂正顕先生は京都学派で戦争に協力して，非国民だと言ってずっとののしられたこともあったことは，後から知ったのです．

―― それは後になって知られたのですか．お父様がそういう方だというのは，いつごろ知りましたか．

岡部 哲学者であったことは最初から知っていたと思いますね．私の父も大学の先生でしたから．

―― 中学のときから，高坂先生のお父様がどのような方か知っていたわけですか．

岡部 そうですね．高坂正顕の名前は知っており，1回か2回，お姿を見たこともあると思いますが，印象には残っていません．

―― 姿を見たというのは，高坂先生の御自宅に遊びに行ったということですか．

岡部 そうです．ただ，遊びに行って入り浸ったという記憶はないですね．

―― 囲碁はしなかったということでしたが，何回か遊びに行ったときには，どんな遊びをされていたんですか．

岡部 いや，そういう記憶がまったくないですね．ただ，下鴨の邸宅は憶えています．いや，京都の下鴨には学者のお宅が沢山ありました．湯川秀樹先生の家は次男の高明君と親しかったので，彼の家に入り浸って遊んでいたのはよく憶えています．ただ，高坂の家へは行ったことがあるという程度で憶えていません．

彼の結婚後のことですが，私の家内は時々訪ねていたようですが．

―― そうですか．奥様同士が近しかったんですね．

岡部 そうです．二人は下鴨小学校から，中学・高校を通して，ずっと一緒でしたから．

―― 奥様同士が同じ学年だったんですか．

岡部 そうです．

―― たしか（高坂・岡部よりも）2年後輩でしたね．

岡部 2年後輩です．

―― 奥様については，のちほどおうかがいするとして，その前に洛北高校時代についてです．

洛北高校時代

―― 洛北高校時代，岡部先生と高坂先生は同じクラスになったことはありますか．

岡部 1学年に13クラスもあって，同じクラスになったことはなかったです．ただ，クラス単位でずっと授業があるのではなくて，物理とか世界史とか科目別のクラスもあって，そこではよく一緒になりました．かすかに憶えているのは，服部先生の本にも出てくる漢文の池田先生の講義を一緒に受けたのは間違いありません（『高坂正堯』18頁）．

高校の先生のなかで高坂が誰にもっとも感化されたかというと，池田先生が一番大きかったと思います．青柳英夫先生は校長で，行政職であって教科の担当はありませんでした．ほかにもユニークな先生がおられたので，彼がどういう感化を受けたのかは分かりませんが．

漢文の池田先生は強烈な人で，私もその講義は熱心に聞いたのですが，漢文を白文で暗記させて，暗唱させるスパルタ式でした．すごく厳しい教え方でした．ですから，今でも私は白楽天の「長恨歌」を全部暗唱できます．70年経っても全部憶えているのです．「漢皇色を重んじ傾国を思う御宇多年求むれども得ず」．そんなのを憶えさせたような先生ですから，すごい先生でした．高坂にもこの池田先生の影響は確かにあったでしょうね．

―― その影響というのは，漢文の内容というよりも，その先生の厳しさという意味ですか．

岡部 そう．厳しさですね．

―― 学問に対する厳しさのようなものですか．

岡部 うん．知識というよりも情熱ですね．

―― 情熱ですか．

岡部 なんでもとことんやるという，そういう根性を植え付けてもらった先生でしたね．

―― 学生さんは暗唱させられた，つまり口頭で言わされたんですね．

岡部 もちろん暗記をして復唱するし，白文でも書かされる．もう非常に厳しかったですね．今

はどうなっているのでしょうか．国語は一般の国語の後に古文と漢文の選択があって，そのおかげで漢文は常に満点が取れましたね．

―― 岡部先生と高坂先生は，ともに洛北高校の生徒会で活動をされていましたか．

岡部 私はそんなに活発に活動をしていなかったのですが，高坂は自ら立候補して積極的に動いていました．

洛北高校は，新設高校で，我々が実質的には募集されて入った第1期生でした．1年上もありましたが，それは既に鴨沂高校とか，朱雀高校とか，堀川高校とか，近隣の高校に入っていた生徒を寄せ集めて作ったクラスでしたから，我々の学年が全体をリードすべしと自負していました．

ですから，彼は2年ぐらい，会長をやっていたと思います．はっきりは憶えていませんが．

―― 当時の洛北高校は，先ほど1学年13クラスとおっしゃっていましたね．

岡部 そうです．1年上は500人，我々の期は650人いました．

―― 650人ですか．

岡部 そうです．

―― それは多いですね．

岡部 そう．めちゃくちゃに多かったです．今はその3分の1しかいませんが，先日，見学に訪れたときに，それでも校舎が狭いと先生がこぼしていましたので，びっくりしました．当時は3学年で全部で2000人いたのです．

―― いただいたお手紙によりますと，洛北高校主催の模試が受験前6ヶ月ぐらい，毎月のようにあったわけですか．

岡部 そうです．6ヶ月ではなく，1年ぐらいあったと思います．

―― 1年ぐらいですか．

岡部 そうです．ただ，最後の半年は毎月のようにあったと記憶しています．

―― お手紙によりますと，模試では岡部先生と高坂先生が1，2を常に争っていたとありますね．

岡部 全体の1位，2位ではなく，現役のなかでの順位はそうでした．浪人生がたくさんいたから，浪人のほうがよくできるのは仕方がありませんでした．

―― 浪人生も受けられる模試なんですか．

岡部 もちろん浪人生も受けられて，浪人は受験勉強だけやっていたのですから，よくできました．それでも，高坂と私は3位とか4位とか5位とか，上位10位ぐらいには必ず入っていました．

―― 現役ではお2人の成績が傑出していたわけですか．

岡部 そうだったと思います．当時は，今と違って医学部はそんなに難しくなかったです．法学部が断トツに難しかったのです．経済学部も法学部より易しかったのです．

―― 医学部よりも法学部のほうが難しかったんですか．

岡部 当時はそうですね．昨今とは違い，当時は確か，そうでした．

―― それは京大に限らずですか．

岡部 全国的にそうだったと思いますね．

―― 全国的に．

岡部 医師の人気は今みたいに高くなかったわけですね．今が異常ではないでしょうか．

―― それで，お手紙によりますと，高坂先生は高校3年生のとき，東大を受けると言い出したんですか．

岡部 そう．急に東大を受けると言うから，「へえ．じゃあ俺も東大を受けようか」と，売り言葉に買い言葉で考えたんですが．

―― これは東大の法学部という意味でしょうか．

岡部 おそらくそうだったでしょうね．

―― 東大法学部の可能性が高そうですか．

岡部 当時，東大は文1，文2という区分でした．今でも同じで法学部は文1からの進学が主でしょうね．

―― 高坂先生は何を意図して東大と言い出されたんでしょうか．

岡部 いや，それは分かりませんが，やっぱり挑むなら日本一の大学だという感じではなかったのかな．ただ，当時は新幹線もなく，東京へ行く

のは大変だったのです.

―― そのとき高坂先生は何かを目指して，例えば国家公務員の可能性も視野に入れて東大も検討してみたというようなことを話していましたか.

岡部 いや，それはありません．そういう具体的なキャリア意識はなかったと思います.

―― そうしますと何かを目指してというよりも，成績が優秀だったので，せっかくなら東大をという感じですか.

岡部 彼は，公務員を目指すといった意識はそもそもなかったと思います．司法官を目指す気持ちもまったくありませんでした.

―― 高坂先生は高校のころに学者になりたいと言ったことがありましたか.

岡部 はっきりは言っていなかったですが，そういう雰囲気はありましたね.

―― いつごろから学者志望になったのか，高校を卒業されてから何か話したことはおありですか.

岡部 いや．それは話したことはあるのかも知れませんが，それこそまったく記憶にありません.

―― 当時の東大法学部は，リベラルでしたよね.

岡部 そうです．彼の内心は分かりませんが，要するに大学を受ける時点で国際政治学者になろうという意図はなかったと思いますね．大学へ入って，それも2年次が終わったころに決めたのではと推測します.

―― 高坂先生は一時的に東大を考えたにしても，もともとの志望は京大で，それも法学部を最初から志望されていたんでしょうか.

岡部 そうです．初めから，法学部一本でした.

―― お父様が学んだ文学部は考えなかったのでしょうか.

岡部 文学部というのは考えたことはないと思います.

―― そうですか．その理由について何かおっしゃっていましたか.

岡部 いや，理由は聞いていないけれども，初めから文学部などは考えていないという感じでしたね.

―― それは，成績がずば抜けてよかった学生は法学部に行くのが当たり前という流れからでしょうか．それとも…….

岡部 文系志望の場合はそうでしたね．ただ，そこのところはまったく分かりません.

―― 何かこだわりがあって，法学部志望だった感じはありましたか.

岡部 そういう雰囲気はなかったと思います．国際政治学者になるために法学部に入るという意識は京大受験の段階ではなかったものと思います.

私ももともとは理系志望でしたが，何となく法学部に鞍替えしました.

―― 当時，まだ国際政治学の講座がなかったですよね.

岡部 そうです．当時は今と違って，国際政治の講座がないだけではなく，法学部は刑法や民法などの解釈法学が主流でした．さらに教養課程の2年間は，専門分野には分かれず，まったくフリーでした．フリーというか，専門教科は教えなかったのです.

―― 教養部ですか.

岡部 そうです．教養部で1年間は宇治分校に行って，1年間は吉田分校に行って，語学を中心に勉強していたのです．その間に将来の方向を考えるのが普通でした．その過程で，高坂は国際政治に傾いたものと思いますね．受験の段階ではそこまで考えていなかったと思います．私自身も全然考えていなかったですから.

―― 教養課程のうち，1年間は宇治，1年間は吉田で，その後2年間，専門課程になるわけですね.

岡部 そうです.

―― 洛北高校から京大法学部の現役合格は，岡部先生と高坂先生の2人だけですか.

岡部 現役での合格は2人だけでした．浪人生が2人か3人入りました.

―― その当時の洛北高校は，1学年が650人で，お手紙によりますと，そのうち，浪人生を含めて約50人が京大に入ったんですか.

岡部　60 人近かったですね．半分が現役で，半分が浪人生でした．

――　そのなかで高坂先生と親しくされていた方としては，岡部先生以外にも，どなたかいらっしゃいますか．

岡部　いや，それは分かりません．ただ，洛北会の仲間の誰に聞いても，俺が親しかったと言うのはいません．

――　洛北会の方々が，例えば高坂先生と一緒に野球をやったりとか…….

岡部　それは，なかったですね．

――　高坂先生は，京大では野球をやってますよね．

岡部　京大の準硬式野球部に入っていました．

――　準硬式の野球部ですね．

岡部　そうです．当時は関西 6 大学のメンバーであった硬式野球部とは別のクラブです．

――　京大に入る前は野球をやっていませんでしたか．

岡部　洛北高校のときはほとんどやっていなかったです．

――　大学に入ってから野球を始めたんですか．

岡部　そうです．だから，野球といっても準硬式のマイナー野球でした．それでも，東大との定期戦はやっていました．

――　では，次に京大法学部時代にいきたいと思います．

京都大学法学部時代

――　岡部先生と高坂先生は 1953 年 3 月に洛北高校を卒業し，4 月に京大法学部に入学されます．新制の洛北高校としては，第 2 期卒業生になるわけですか．

岡部　洛北高校卒は 2 期です，1 年上の 1 期生はほかの高校からのかき集めでしたから，実質的には 1 期と自認していましたが．

――　岡部先生と高坂先生は京大法学部に入学後に，洛北高校と京都一中の同窓会の合併を推進されたのでしょうか．

岡部　これは合併推進ではなく，合併すると決めたから手伝ってほしいと青柳校長先生からの要請で手伝ったのです．京一中の同窓会との合併が必要といった意識は，洛北高校の卒業生にはまったくありませんでした．それは青柳校長と永末英一さんの議論で始まったものです．

同窓会の合併に当たっては，総会の招集とか名簿の整備，機関紙「あかね」の発行準備などの仕事が沢山あるので手伝ってほしいと青柳先生から，何人か招集されたのです．卒業生は数人，10 人もいなかったと思います．そのなかで高坂と私は大学へ入って暇だからということで，率先して手伝ったと記憶しています．

――　大学 1 年生のころですか．

岡部　主に 1 年から 2 年にかけてでした．

――　1953 年 11 月 23 日に第 1 回合同総会があったようですね．

岡部　そうです．

――　青柳先生が会長になって，永末英一さんが理事長ですか．

岡部　そうです．でも，青柳先生は校長で当事者，同窓生ではないので，京一中側の永末さんが実質的にはトップでした．

――　永末さんは当時，日本社会党の府議ですか．

岡部　当時は府会議員でした．社会党右派でしたから，社会党の左派の労組上がりの闘士のような印象はまったくありませんでした．むしろ温和で貴族的なお人柄でした．

――　岡部先生と高坂先生は京大 1 年のとき，同窓生の合併の交渉で永末さんと知り合ったわけですね．

岡部　そうです．

――　その交渉の場に高坂先生もいたわけですか．

岡部　いや，交渉と言うとちょっと語弊があって，合併するという方針はすでに青柳校長が決めておられました．ただ，どちらかというと青柳先生は受け身でした．というのも，新しくできた高校で，同窓生は 2 期しかおらず，やっと洛北高校の同窓会をつくったところへ永末さんが会長をし

ておられた京一中の同窓会から，すぐに合併してほしいという申し出があったのですから．

―― 永末さんが言い出したんですね．

岡部 もちろんです．永末さんというか，京一中の同窓会が決議をして，申し入れてきたわけです．

―― 京一中の側からですね．

岡部 これはすごいことだったと思います．他の高校を見てみると，いまだにバラバラです．その後，合併した所もあるし，現在まで別立ての所もあります．京一中というのはなくなったわけですから，放っておくと，何十年か経ったら同窓会は自然消滅するしかありません．だからといって，今のうちに合併して１つの同窓会にしておいたほうがよいという発想はなかなか出て来ません．

当時の京一中の同窓会の幹部を説得して，永末さんがまとめた案で合併してくれと言ってこられたのです．

そんなことは洛北高校同窓会のほうは思ってもいなかったと思いますが，よく考えてみると，湯川秀樹や朝永振一郎といったノーベル賞受賞者を初め多くの俊英を輩出した京一中のプレステージというか，ヘリテージを使えるのは，洛北高校にとっても最高の仕組みでした．だから，青柳校長は「分かりました．それじゃあ，やりましょう」と決められ，我々は，その後の事務的な打ち合わせや合併の準備をしたのです．

―― その同窓会は毎年，開かれていたわけですか．

岡部 年に１回の総会を開催，それ以外にも当時は，幹部会というのを３カ月に１回ぐらい開いていたと思います．

―― その幹部会に，岡部先生，高坂先生，永末さんが常にいたのですか．

岡部 そうです．京一中 OB の偉い方もあと 2，3 人おられましたが，永末さん１人で仕切っておられたという印象です．洛北側は，我々の同期では高坂と私，あと同窓生が 2，3 人いて，さらに，2 年下ぐらいの在校生も手伝ってくれていました．その在校生のなかに木津恵さんとか，私の家内がいたわけです．

―― その方々は，同窓会の幹部でいらしたわけですか．

岡部 同窓会の幹部というか，世話役でしたね．青柳先生に指名された幹事団ですね．

―― 青柳先生が指名したわけですか．

岡部 指名というか，頼まれたものと思います．在学中に自治会で活躍していて，しかも，過激でない人材が選ばれたのではないかと思います．当時は共産党系の過激な学生も結構いましたが，同窓会には不向きでした．

―― そうしますと，その幹事というのは大体，生徒会役員の方が多かったわけですね．

岡部 そうです．生徒会の穏健派でしたね．

―― 穏健派．生徒会にも左寄りの方は結構いたのですか．

岡部 当時はいました．

―― 生徒会長の高坂先生と衝突したりはしなかったのでしょうか．

岡部 いや，それは結構あったと思います．だけど私の印象では，どちらというと高坂は穏健派で，過激派は抑えて，自治会を運営していました．

―― 高坂先生は高校のときから穏健派でしたか．

岡部 そうです．穏健派というか，ましてや，同窓会なんかにそんな争いごとを持ち込むべきではないという考えでした．

―― 当時，マルクス主義全盛期だと思いますけど，高坂先生がそれに少し傾いたということはなかったですか．

岡部 まったくなかったですね．それははっきりしていました．京大では過激派が主流で，学生運動は活発に行われていました．学生運動が非常に燃え盛ったのは我々の 10 年ぐらい後ですが，我々のときでも，革マルとか全共闘のすごいのが大勢いました．

―― 高坂先生は穏健派であるとともに，反共ともいうべきところがありましたか．

岡部 そうでしょうね．思想をめぐっての論争をした記憶はありませんが，そういう印象でした．

―― その後，永末さんは国会議員になりますね.

岡部 そうです．その後，参議院選挙に1回，衆議院選挙に10回当選されて，1989年には民社党の委員長（党首）になられました.

―― 高坂先生や岡部先生は，国会議員としての永末さんとも接点がありましたか.

岡部 国会議員になられてからも，京一中洛北同窓会の理事長は6年間務められ，その後もずっと亡くなられるまで同窓会には出ておられたものと思います.

―― 高坂先生と岡部先生は，大学を卒業してからも年に何回か，永末さんと会っていたのでしょうか.

岡部 そう．大学を卒業してからも，しばらくは会っていたように記憶しています.

―― 高坂先生は大学を出てすぐ，助手になって助教授になりますけれども，永末さんとは大学1年生からずっと接点があったわけですか.

岡部 あったものと思いますね．彼はずっと京都にいて，同窓会の仕事はずっと手伝っていましたから．実質，洛北高校側のリーダーでした.

当時の同窓生は圧倒的に京一中のほうが多かったですが，今は逆転しています．2020年には京一中創立150周年，洛北高校創立70周年を迎えますが，この同窓会の会長には，奇しくも高坂正堯の弟の節三さんが昨年に就任されました.

―― 高坂先生は国政選挙のときに，永末さんに投票していたと思われますか.

岡部 それは間違いないと思います．それは思想信条には関係なく，同窓会の仲間としてずっと一緒にやってきたのですから，応援するしかありません．永末さんも献身的に同窓会活動をやってくれましたから．もちろん政治家ですから，下心もあったのかも知れませんが.

―― それはそうでしょうね.

岡部 だけど，それにしても破格でした．我々10人ぐらいを京都の一流の西洋料理屋でごちそうしてくれたりしました．ですから，社会党の代議士という雰囲気はまったくなかったですね.

―― 高坂先生と永末さんは，同窓会という面を除いても話が合う感じでしたか.

岡部 いや，そこまでは分かりませんが，永末さんは東大法学部の政治学科卒で，現職の政治家でしたから，政治学志望の高坂と話題は合ったでしょうね.

―― 洛北会の話に少し戻りますけれども，お手紙によりますと，洛北会の生徒の15人の過半が京大の理系に進んで，大学入学後も年に何回か集まってブリッジなどをされていて，高坂先生もその洛北会の集まりには精勤だったとあります.

岡部 そうです．それは絹川君からのレターにもそう書いてありましたね.

―― ええ.

岡部 その通りだと思います．絹川君は京大工学部を出て，中堅建設会社の現役社長をいまだに務めています.

―― 洛北会の同窓会に，高坂先生は大学入学から他界されるまでほぼ出席されていたのですか.

岡部 出席率は非常に高かったと思います．仲間のなかでも，高坂は特に高かったと思います.

―― 洛北会の集まりは京都でやっていたんですか.

岡部 そうです．いつも京都でした.

―― 常に京都ですか.

岡部 桑垣先生の家にお邪魔したこともありました．通常は，京大の会館に集まっていましたが.

―― そういう洛北会同窓会の集まりで，高坂先生はよく話すほうでしたか.

岡部 よく話しました．むしろ，そういう遊びのリーダー的存在でした．勉強がよくできるというガリ勉タイプではまったくありません.

―― 遊びというのは，先ほどのブリッジなどですか.

岡部 そうですね.

―― ブリッジは高坂先生が始めようと言ったんですか.

岡部 いや，ブリッジは桑垣先生から教わりました．ただ，特定の遊びということではなくて，そういう集まりを招集したり，企画したりするリ

ーダー的なところがありました.

―― ブリッジ以外に何か，ご記憶のことはおありですか.

岡部 あとは，江田島への旅行やスキーに行った記憶もあります.

―― 皆さん，スキーができたんですか.

岡部 いや，そうでもありません．高坂がスキーに来たかどうかは憶えていません．70 年前のことですから.

―― 洛北会のメンバーで岡部先生，高坂先生以外に大学教授になった方はいますか.

岡部 教授になったのはいません.

―― お二人だけですか.

岡部 ただ，企業に行って研究者になった仲間は結構います.

―― お手紙によりますと，高坂先生は京大 1 年生のとき，J5 のフランス語クラスで野球や囲碁に熱心で，岡部先生は J2 でヨットや ESS をされていたとあります．お二人は，学内ではあまり顔を合わさなかったのでしょうか.

岡部 同じ学部でも，学内では接点が全然なかったですね.

―― そうですか.

岡部 同じ講義を聴くこともあまりなかったと思います．そうは言っても，私も田畑茂二郎先生の国際法とか，猪木正道先生の政治学の講義なんかには出ていましたから，そういうときは顔を合わせていたと思いますが.

―― 大教室ですからね.

岡部 そうです.

―― 高坂先生が最前列で聴いていたというふうに，猪木先生は回想されていますね.

岡部 そうだと思いますね.

―― 高坂先生がフランス語を選んだ理由は分かりますか.

岡部 それは測り兼ねますね．当時はほとんどがドイツ語で，フランス語を選ぶというのは少数派でした．法学部でフランス語を選んだ学生は 1 学年に 50 人もいなかったです.

―― そして先ほどのお話のように，高坂先生は準硬式野球の部員になるわけですか.

岡部 「軟式野球」と言うと，「それは間違っている，準硬式だ」と言っていました.

―― そこに高坂先生は入られて，高坂先生が本格的に野球をやったのは，そのときが初めてなんでしょうか.

岡部 そうでしょうね．どれほど本格的にやったのかどうかは分かりませんが，ずっとレギュラーだったと言っていました.

―― そうですか．ポジションはどこだったんでしょうか.

岡部 ポジションは知りません．ピッチャーではなかったですね.

―― 野手ですか.

岡部 そうでしょうね.

―― レギュラーでどこを守っていたのか，気になりますね.

岡部 いや，それは東大チームにいて京大と対戦した栗田さんに聞いたら，分かるかも知れませんね.

―― 高坂先生は当時，野球ではどのチームのファンだったかご存じですか.

岡部 いや，それは知りませんが，彼は虎キチとして有名でしたね.

―― 後年はそうですけれども，最初は巨人ファンだったと弟さんが書いていますね（高坂節三『昭和の宿命を見つめた眼―父・高坂正顕と兄・高坂正堯』PHP 研究所，2000 年，264-265 頁）.

岡部 節三さんが言っておられるのであれば，間違いないでしょう.

―― 野球選手で誰のファンだとか，そういう話はしてないですか.

岡部 したことはないですね.

大学卒業後

―― 高坂先生は学卒助手として大学に残りますね．そのことについて，岡部先生が高坂先生と何か話したことはありますか.

岡部 直接話したことは，まったく記憶していません.

―― そうですか.

岡部 ただ，私が比較的その事情に詳しいのは，もうまったく消えた話ですから自分史にも書いていませんが，私自身，あわよくば京大の先生になれないかなという気持ちを持ったことがありました.

そこで，3年次の終わりぐらいだったと思いますが，ゼミの先生であった大隅健一郎先生に相談したのです．すると，言下に「京大に残るのは駄目だよ，君．君には残念ながら，昭和32年卒同期の助手採用は高坂と決まっているんだ」とおっしゃられました．要するに，京大法学部は毎年1人しか助手を採用しないルールとなっているところ，そのころに候補者はもう高坂一人に絞られていたわけですね.

私と同じゼミで非常に優秀であった谷口安平先生も駄目だったのです．谷口先生は大変優秀であったので，高坂でなければ，当然彼が残っていたのでしょうが.

学生には分かりませんが，助手採用にはいろいろな学内の事情があったようです．前年には大隅先生のあっせんでいったん東洋紡に入社が内定していた龍田節さんが商法の助手に採用されていました.

―― それは高坂先生の前の年の話ですか.

岡部 前の年，昭和31年です．それで，立て続けにまた大隅先生のゼミから谷口を採用するわけにもいかないし，ましてや私みたいなのを選ぶわけにはいかなかったのでしょう．ただ，大学の先生になりたいのであれば，2年か3年ほど大学院で勉強すれば，必ず，私学のどこかのポジションは用意してあげるよとは言っていただきました．そのルートに乗って行った友人も，何人かいましたね.

―― そのルートというのは，いったん京大の大学院に入ってということですね.

岡部 そうです.

―― そうしたら，割と早い時期にどこかという話もあったわけですか.

岡部 そうです．同期で親しくしていた田北亮介君は2年間大学院に行って，龍谷大学の国際政治論の先生になりました.

私は学者には向いていないと思って，その道はとっとと諦めたのですが．それで，最初は司法官になろうと思い，次に公務員に転換して公務員試験は受かったのですが，結局それも辞めました.

高坂の場合は，3年次の終わりぐらいに，京大に残れることがほぼ決まっていたのでしょうね.

―― 決まっていたというのは講座で言いますと，田岡良一先生の国際法でしょうか，それとも猪木先生の政治史になりますか.

岡部 そこのところは曖昧というか，知りません．当時はそういう区分がはっきりしていなかったのではないでしょうか．解釈法学とそれ以外という分け方でした．国際法は解釈法学には入っていなかったと思います．国際法とか，政治学というのは，司法試験とか，公務員試験の科目にはなかったですから.

―― ええ.

岡部 田岡先生のゼミに入っていたのかどうか知りませんが，田岡先生と猪木先生と両先生に師事していたのではないでしょうか.

―― 高坂先生から，田岡先生と猪木先生のうち，特にどちらに気に入られたということは聞いていますか.

岡部 いや，聞いていませんが，やはり猪木先生に非常に傾倒していたと思います．猪木先生が強力に推薦されたから，この年の助手は彼に決まったのでしょう．学業成績は間違いなく1番ではなかったです.

成績は住商に入った小塩修一君が1番でした．1番が誰かなんていうのは通常は分からないのですが，卒業式のとき，学部持ち回りで答辞を読むのが1番で，この年は法学部の番であったのです.

―― 小塩さんですね.

岡部 住商の専務になりました.

―― そうですか．学卒助手になるには平均点が80点ぐらい，つまりオール優ぐらいでないと厳しくないですか.

岡部 いや，その辺が難しいところで，そもそ

も解釈法学でやっていたら，オール優なんてあり得なかったですね．当時は，「オボ 6，イソ 6，タキ 6」と言って，於保不二雄先生（民法）と磯村哲先生（民法）と滝川幸辰先生（刑法）は 60 点しかくれなかったので有名でした．80 点もらうのは 1 人か 2 人しかいなかったという話もありました．ですから，全優は無理でした．

ところが，日本法制史だとか，国際法とか，行政学だとかは比較的簡単に 80 点以上の優がもらえたのです．難しい刑法とか民法を取らなかったから，1 番になれたという話ももっともです．

―― 小塩さんとは，お親しいんですか．

岡部 最近はほとんど会いませんが，以前は親しくしていました．大変な秀才でしたよ．秀才は大勢いましたが，高坂の発想力が格段にユニークであったのでしょうね．

とはいえ，猪木先生と田岡先生が推しただけで助手採用が決まるということはなかったでしょうね．ほかの先生方もそれを認めて，教授会を通さないと．特に当時，大隅先生が力を持っておられましたからね．だから，谷口先生も助手採用にはならなかったのですから，高坂についての大隅先生のご了解は不可欠であったと思います．

―― 谷口先生の場合は，そのあとに京大に戻られますね．

岡部 ただ，彼は裁判官になる積りで司法修習を終えた 2 年後に，修習の成績があまりにもよかったために，民事訴訟法の中田先生の推薦で呼び戻されたのです．

―― 谷口先生のオーラル・ヒストリーも拝見いたしました（谷口安平／聞き手・菊間千乃『谷口安平オーラル・ヒストリー――終わりなき好奇心』北大路書房，2018 年）．

岡部 彼の助教授での採用の経緯はあの通り間違いないのですが，やはり，私は大隅先生の力も働いていたのではなかろうかと推測しています．

私は大隅先生が先に申し上げました龍田先生同様に谷口先生も呼び戻されたものと誤解していたのですが，谷口先生から「いや，それはまったく違う．俺はもう司法官になるつもりで，京大の先生は諦めて行ったんだ．そしたら，修習の終わり際に急遽，中田淳一先生から話があった」と聞いてなるほどと思った次第です．ただ，それだけではなかったのではという気もしますね．彼によれば，彼の助教授採用のおかげで，本来なら 3 年経たないと助教授にならないのに，高坂は 2 年で助教授になったということです．谷口を助教授で迎えるということにした余禄ですね．

そんなことは中田先生の力だけでできるはずがなく，また，当時の学内の力関係から言って国際法とか政治学というのは亜流でしたから，解釈法学本流の先生方が皆賛成されて最終的には教授会で決められたのでしょうね．すべて推測で，何の根拠もありませんが．

―― いろんなめぐり合わせがあるんですね．

岡部 そうですね．

―― それで，先ほど，少しお話に出てきた，木津恵さんですけれども．木津さんも洛北高校を経て，京大に進学されましたか．

岡部 いや，木津恵さんは，同志社女子大学の英文科へ進みました．当時は京大法学部に女子学生というのは 4 人ぐらいしかいなかったですね．

―― 私の学年（1992 年卒）ですら，426 人のうち女性は 69 人でした．

岡部 木津恵さんは，非常に頭もよいし，すごくチャーミングな女性でしたが，京大を受験するレベルの成績ではなかったですね．フラッパーと言ったら失礼かも知れませんが，「翔んでる女」でした．演劇のプリマドンナになるのを好んだり，なかなかやり手ですごい女性でしたね．

―― 当時の京大の法学部は 1 学年で何人ぐらいでしたか．

岡部 50 人が 5 クラスだから，250 人．

―― 250 人で，女性はほとんどいなかったわけですね．

岡部 女性は 4 人ぐらいだったです．

―― としますと，1 クラスに……．

岡部 1 人いるかいないか．J2 組には 1 人もいませんでした．

―― 女性が非常に少なかったんですね．

岡部　そうです．

――　高坂先生は恵さんと 1958 年 6 月に結婚されています．この結婚式には出席されましたか．

岡部　出ていません．招待された記憶もないし，私の結婚式にも招待していません．それほどの親友ではなかったのです．

――　御著書『国際金融人・岡部陽二の軌跡』41 頁に，「大学卒業後も，高坂君とは親しく交際した．彼が英国の国際戦略研究所を訪れるたびに，ロンドンに勤務していた我が家にも再三，来てくれた．彼の奥さんと私の家内も親しく，家族ぐるみの付き合いであったが，彼が奥さんと離婚したことから，互いに気まずくなったことは残念としか言いようがない」とあります．高坂先生がロンドンのご自宅を訪ねたというのは，岡部先生が 2 度ロンドンに勤務されたうち，どちらかですか．

岡部　最初のときだけです．1976 年から 1977 年でした．

――　その 2 年ぐらいですか．

岡部　そうです．ロンドンで会ったのは 3，4 回ですかね．その 1，2 年後に奥さんとの関係が悪くなって離婚してしまいましたからね．彼がロンドンに来たときには，私の家内とも高坂は親しかったので，私がいなくても「多賀ちゃん，お茶漬け食べさせて」なんて言う関係でした．

家内が「お土産の買い物をお手伝しましょう」と案内して高坂に「これ，奥さんに」と言ったら「いや，娘だけで女房には買わんでいいんだ」と言われてびっくりしたことを憶えています．

――　何年ごろのお話ですか．

岡部　それは 1977 年と 1978 年ごろです．

――　ロンドンのご自宅に高坂先生がいらしたときは，お 1 人で来たわけですか．

岡部　もちろん，1 人です．当時は戦後ロンドンに設立された民間のシンクタンクである国際戦略研究所との関係ができて，彼は年に数回，ロンドンに来ていました．私も彼に戦略研究所に連れて行ってもらい，講演会などに参加できるようにアレンジしてくれました．

国際戦略研究所というのは安全保障とか防衛問題が専門の国際的な研究所ですが，非常に開かれた研究所で，一般人の聴講を認める講演会や討論会なんかもやっていて面白いから時々行ったらよいと勧められたのです．それで，そういう講演会に何回か参加しました．

――　先ほどのお話の中で，「多賀ちゃん，お茶漬け食べさせて」の「多賀ちゃん」は岡部先生の奥様ですね．

岡部　そう，多賀子です．恵さんとは小学校からの親しい友達でした．

――　小学校からですか．

岡部　そうです．彼女が離婚してからも，亡くなる直前まで同窓会などで付き合っていました．

――　恵さんはその後，再婚されたんですか．

岡部　していません．娘さんが面倒を見てくれていました．娘の旦那さんがダンスの教室をやっていて，それを手伝ったり，それから，英語ができたので私塾を開いて英語を教えたりして，恵ちゃんは生計を立てていたようですね．

――　先ほど，お土産を奥さんには要らないと言うのでびっくりしたというお話でした．何となく関係が悪くなっているなという雰囲気があったんですか．

岡部　それはあったものの，離婚するとは思っていませんでした．当時の週刊誌に奥さんの不倫などがガンガン書かれて，それで知ったのです．

――　週刊誌ですね（高坂，猪木，仲人だった田岡らが『週刊現代』1979 年 2 月 28 日号でインタビューに答えている）．

岡部　そのころの週刊誌を見たら，かなり露骨に書いてあったと思います．ただ，その離婚の原因は後付けで探ったもので，本当のところは分かりません．私は高坂は離婚までは考えていなかったけれど，これも 100 パーセント推量ですが，私はやはりお母さんにいびり出されたのではなかろうかと見ています．

――　高坂先生のお母さんにですか．

岡部　そう．いびり出されたというか，離婚したといっても，高坂が絶縁状を突き付けたのではなく，実は恵さんが出ていったのです．

―― 高坂先生のお母様とも岡部先生は何度か会っていますか.

岡部 いや，お顔は見たことがありますが，存じ上げません．お父さんは優しかったけれど，お母さんはかなり厳しい人だったらしいと憶測しているだけです.

そもそも，こんなことを申し上げるのは，亡くなった方に失礼かもしれませんが，杉山一郎君からのメールにもありますように，高坂にはK.Tさんという同期で非常に親しい女性がいたのです.

―― いつの同期ですか.

岡部 我々の洛北高校の同期生で，彼女は素晴らしい才媛でした．今はどうしているか知りませんが，高坂はK.Tさんと結婚するものとばかり思っていたのです．ところが，家柄がよくないと言うことで，お母さんが猛烈に反対して交際を禁止して潰してしまったのです．その直後に，京一中洛北高校の同窓会合併の仕事で，恵さんと急速に親しくなり，あっという間に結婚してしまったのです．彼女はまだ大学の3年生でした.

たとえて言えば，英国のチャールズ皇太子みたいなもので，K.Tさんは今のカミーラ夫人みたいな感じでした．恵さんはダイアナのようにきれいで派手好きでした．ですから，初めからボタンの掛け違いがあったんでしょうね.

〈付記1〉

栗田瑞夫「丸山眞男 高坂正堯 二人の碩学」（日本工業倶楽部『会報』第263号，2018年）46-52頁に，高坂が準硬式野球部員だったことなどについての記述がある．2019年2月4日，株式会社ジェムコ日本経営監査役の栗田とも日本工業倶楽部で会い，高坂が野球では右投げ左打ち，ポジションはショートだったことなどを聞いた．野球のボールには硬式，準硬式，軟式の3種類があり，高坂の野球は硬式と軟式の中間に当たる準硬式だったという．準硬式のボールは，トップボールと呼ばれる.

〈付記2〉

高坂は中央公論社の雑誌『will』に以下の論文を掲載していた.

高坂正堯「日本の経済力をソ連の軍事力以上の撹乱要因としないために」（『will』1983年10月号）35-38頁

高坂正堯「『お相伴』から『自己認識』の国際的姿勢へ」（『will』1983年10月増刊号）202-203頁

高坂正堯「吉田茂の交渉力の奥義」（『will』1984年9月特別号）41-45頁

陳舜臣・高坂正堯「日本人と中国人の『海』『川』『砂漠』」（『will』1985年9月特別号）100-103頁